

小説は「人間の心」を知る練習問題だ

図書館係 阿部健治

まず、次の文章を読み、その後の設問に答えてもらいたい。本文は三島由紀夫作『真夏の死』という短編の一節である。実は1年生の1月実力テストで出題したのだが、**正解率は1割未満**であった。簡単なはずのこの問題が解けないのはなぜなのか。筆者はズバリ、この背景には諸君の**読書不足**があると見た。

七七忌がすぎる。夫婦は多磨墓地に土地を買った。分家の最初の墓がそこに建ち、最初の死者が埋められることになるのである。

悲しみは、**①朝子の危惧**に反して、また日に新たに日にこまやかになった。夫婦は買った土地を見に、子ども連れで墓地へ出かけた。すでに初秋である。

三年以上たった夫婦の間には、まじめな事柄というものは何一つありえないのが本当だが、悲嘆は二人を別々な色合いでまじめにしていた。一緒に出かけるときなどは一層そうであった。第三者の目には、これだけが夫婦の共通点とも紐帯とも見えるはずだから、勝(まさる)と朝子(ともこ)は生真面目さにほれ合って結ばれた夫婦のように見えたであろう。その日はまことによい日で、暑さはすでに空高く遠のいていた。記憶はわれわれの意識の上に、時間をしばしば並行させ重複させる。朝子はこのふしぎな作用を、その日に二度経験した。それはその日の空気と日光があまりに澄明で、朝子の心の無意識の領域までが、日を浴びて半透明に明るんでいたせいかもしれない。**※あの事件**の二カ月ほど前、勝は無傷であったが自動車事故を起こしたことがある。事件後朝子は克雄を連れて出かけるときには、決して良人(おつと)の車に乗らなかった。今日は御相伴で、勝も電車で行かねばならない。

多磨墓地行きの小さな汽車に乗り換えるために、M駅で省線電車を降りたときのことである。勝は克雄を抱き上げて先に降り、朝子はこれにつづいて降りた。降車の客はかなり多かったので、朝子が降りたのはドアが閉まる寸前であった。彼女は自分のうしろに鋭い呼笛とともに閉まる扉を見た。そしてほとんど叫んで、その閉まらんとするドアを自分の力で引き開けようとした。一緒に連れてきた清雄と啓子を、車内へ残してきたような気がしたのである。不審そうに良人が朝子の腕をとらえた。彼女は人中で刑事に腕をとられた女のように、一種不敵な態度で良人を見返した。次の刹那には冷静に返って、その錯覚を丹念に話したが、きている良人は何かきまりのわるさを感じた。妻が感情を誇張していると感じたのである。

追憶をわが手の中に、あるいは一つの身振り、一つの現前の行為の中に、とらえようとするこうした衝動的な熱情を、勝がわざとらしいと感じたのは正当であろうか？朝子は生きることのもどかしさを、大変つたなく訴えたのである。墓地行きの古風な小さい汽罐車が、幼い克雄を喜ばせた。それはラツパ型の煙突を持ち、奇妙に背が高く、高下駄をはいているようであった。黒くすすけて、機関士のひじを掛けている木製の窓枠は、炭で作ったもののように見えた。

汽罐車は、永いこと、つぶやいたり、ため息をしたり、歯ぎしりをしたりしてから、郊外の平凡な田園の中へ旅立った。

(注)※あの事件……朝子と勝の子どもである清雄と啓子が海で溺死した事件。夫婦にはたった一人、克雄という息子が残された。

設問 傍線部①「朝子の危惧(「おそれあやぶむこと」)」とは、どのようなことと考えられるか。30字以内で説明せよ。

1年生覚えているかな？2年生のみなさん(先生方も)、どうであろうか。

この問題、実は**傍線部を含む一文だけで解決**する。「悲しみは、朝子の危惧に**反して**、また日に新たに日にこまやかになった」という一文だ。「反して」とあるのだから、論理的に考えて、「朝子の危惧」とは、まずは「『悲しみ』が『日に新たに日にこまやかにな』らないこと」となるであろう。このうち、「日に新たに日にこまやかになる」とは、「日がたつても薄らがない」ということだから、それに反するのなら「日がたつにつれて(悲しみが)薄れること」となる。設問の要求が30字なので、重要情報である「何の」悲しみかを書き加えた(記述問題の解答を作る上ではこのプロセスも大切ですよ)、「時がたつにつれて、子を失った悲しみが薄れるということ。(27字)」が模範解答となる。

以上のように、易しいと思われる設問の正解率がこんなに低いのはどうしてか。第一に「**文脈をきちんと追う**」という基本が身につけてないからだろう。採点をしていても、本文中のこのあたりを引用しておけばいいんじゃないの、という安易なものに多く接する。漢字の書き取りでも、まるでワープロの変換ミスのような(例えば「拘束」を「校則」とするような)語を書いて平気な顔をしている解答(顔は想像だが)が少なからずあるが、これらもその一環であるように思われる。そして、より本質的な問題として「読書不足」があると筆者は思うのである。本問の正解率が低いのは、諸君に「悲しみはできるだけ早く薄れた方がいい」という思い込みがあるからではないか、と筆者は推測した。しかし、**人の心は実はもっと複雑だ**。朝子もちろん苦しさからは逃れたかったが、二月ほどして、悪夢にうなされることなく、すっかりした気分で目覚めてしまった彼女は、死んだ子に申し訳なく感じて涙を流すのである。「**悲しみを忘れることは子に対する裏切り**」。これもまた、人の心の真実なのである。

皆さんはもちろん、親ではなく、ましてや子に死なれた親ではないが、読書によって、そういう人の心の真実を追体験することができる。これは実に大切なことであり、**素晴らしいこと**だと筆者は思うのである。

※臨時休校のため遅くなりましたが、作成当初の「2月号」のままとしました。